
ハンプティ・ダンプティの殻

和泉紀伊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハンプティ・ダンプティの殻

【Nコード】

N0843P

【作者名】

和泉紀伊

【あらすじ】

再婚を間近に控えた園山の元にへいる筈の無い娘、野中奏がやってくる。

彼女は園山が母親との大事な約束を忘れていることを告げる。園山の前妻である瞳、詩を愛した故人・麻生、エヴァ・ブラウンを語る高杉香織、そしてハンプティ・ダンプティ。

『クリスマス・キャロル』のようにそれぞれの主張が園山を突き動かしていく。

去年の文学フリマに出展した小説。

卵男の殻？

バーに来ると一杯分、余計に注文することは園山賢治の習慣になっていた。馴染みのバーテンダーは彼が席に着くと隣の空席にもグラスを置く。それが死んだ親友への手向けであることも心得ている。ライトグリーンのサングラスを外し、胸ポケットにおさめる。それから園山は酒に口を付けた。

片手で東京の観光案内の雑誌を捲っていく。どんどん様変わりしていく東京の写真の端々にキリンが首を伸ばしたようなクレイン車が見て取れた。

グラスの掃除を中断してバーテンダーが問う。「あんたさ、次で何回目の結婚だっけ？」

「数えてくれる奴が誰もいない」

「流石は三度目の正直が無かった男ね。抱いた女の数は？」

指折り数える園山に対し、指で数えられたんじゃないや堪ったもんじゃないわねとバーテンダーは呆れかえる。

「どの奥さんの間にも子供は無かったから、養育費を払わなくて済んでるのが幸いね」

錆び付いたベルの音がする。来客を見て、あら可愛いお客さんが来たみたいとバーテンダー。横目で見ると年端もいかない少女が店内を見回していた。そしてまっすぐにカウンター席へ足を運ぶ。彼女は園山の腕を取ると「こんなところにいたのね、お父さん」と顔をしかめてみせた。

街の夜を見下ろす。ネオンの光がみだりがわしく入り混じる景色は園山に不快感と、ノスタルジアを抱かせる。思えば、ずいぶん高いところに来たものだ。いつか瞳と二人でのぼった東京タワーが小さく見える。窓際を離れてソファに腰掛け酒をあおぐ。

普段は気にならないエアポンプの稼動する音がやけに耳につく。
沈黙に耐えかねて園山は言った。

「高いところから見れば、渋滞すら美しい」

自動車は輪郭を失い、ライトが道路に沿って連綿と続く。まるで
光の川を眺めているようだ。

するとスノードームを弄びながら瞳が眩いた。

「私は渋滞の中にいる方がずっと良かった」

「それは麻生が生きていたからだ」

もう麻生君の所為にするのはやめて。瞳が園山の言葉をさえぎる。
スノードームが床に落ちて、割れた。

「あなたは変わったわ」

「何が不満なんだ。望むものは大概手に入る。家も車も料理も貴金
属も化粧品も、景色でさえこの通りだ」

「そうね。今のあなたなら妻だって買えるでしょうね」

園山は閉口する。

「でも私はあなたの幸せの付属品じゃないの」

アクアリウムの中でネオンテトラが何不自由なく泳いでいる。餌
だけではなく、酸素の世話まで管理された生活。考えると、ぞつと
した。

「今でもあなたを愛しているわ。だけど、もうおしまいにしまし
ょう」

出て行くのか？ という園山の問いかけを瞳はきっぱりと肯定す
る。

寝室へ向かう彼女の後ろ姿を園山は見送る。するとドアの前で彼
女は立ち止まり、ねえと呼びかけた。「あの日の、あの結末の続き
は」と言いかけて彼女は言葉を濁す。

「いえ、もう良いわ。おやすみなさい」

ドアが閉まる。しばらくして酔いが回り、強いまどろみの中で彼
が現れた。相変わらず、夜闇に溶け出してしまいそうな黒髪をして
いる。

「幽霊のつもりか麻生？」

泣き顔ともつかない笑みを園山は浮かべる。次第に意識が遠退く。手から力が抜け、落ちたグラスが床を転がる。グラスは麻生の足元で止まった。

麻生は抑揚のない声で言う。「気を付けて。世界は死で溢れているのだから」

卵男の殻？

野中奏を名乗る少女を自宅に上げる。彼女は園山について親しくなければ知り得ないことすらも雄弁に語ってみせた。けれど彼の心を揺さぶり動かしたのは、奏が湯引きをする仕種で差し出してみせたことだった。結ばれることのないそれは頼りなく宙をさまよう。

お前は誰だ。園山の口から思わず言葉が漏れる。

「娘だってば。あなたがお母さんとの大事な約束を忘れちゃったみたいだから思い出させに来たの」

その時に考えた、もしかしたら彼女は瞳と麻生の間に産まれた子供なのではないだろうかという疑念が今も頭の片隅にある。有り得ない。瞳が、麻生が自分を裏切ったなんて。そう思いたかったが悪い想像は園山の後ろについて歩く。

リビングには安の定、高杉香織がいた。

木屑にまみれる彼女は美しかった。さびれた家具屋の奥の工場で力強くノミを振るい、自分より大きな木材を相手に作業する姿に園山は釘付けになる。

しばらくして彼女はやっと手を止め、汗を拭った。

「私は性善説を信じていてね。木を掘る作業は人生に似ていると思うのだ。生きていると何かを段々と削がれていく。いつしか人の形をなすんだ」

振り返り、香織はいらっしゃいと微笑んだ。

「あんたが彫ってるそれが気に入った。完成したら三十万出す。売ってくれ」

「私は趣味でやってるんでね。もしあなたがどうしても言うなら売っても良いけれど、材料費を加味しても三万がせいぜいだ。それ以上出すと言われるとなんだか裏がありそうで気分が悪い」

「言い値で買おう」

「あなたは物好きなんだな」

「見る目も無くてね」

快活な彼女に園山は惹かれ、すぐに打ち解けた。香織の母親が病気だと知り、金を出そうと言って機嫌を損ねたこともある。園山はその時初めて心から他人に許しを請うた。可愛い人だなと香織は笑い快く彼を許した。

プロポーズした時、一つだけ教えてほしいと彼女は言った。瞳と別れた理由だった。

「俺が家庭を顧みずに働いたからだと思う。親友が死んで、空いた穴をふさごうとがむしゃらになって働いた。仕事は成功したけど、瞳の心は俺から離れていった。流産を契機に深い溝が出来て、離婚した」

瞳と別れて十六年が経つ。彼女は今どうしているのだろう。園山は、何も知らない。

「私は今、自分はすごく嫌な人間だと思ったよ」

「なぜ」

「私の時に、同じことが繰り返されなければ良いと思った。私は身勝手だろう」

仕方ない、そういうものだと言園山は言う。絶対に幸せにしたい。強く思ったけれど、それを彼女に伝える言葉はどうとう見つからなかった。

卵男の殻？

二人で話したいと香織は園山をリビングから追い出した。平静を装っていたが、彼女の内心は不安で満ちていた。彼が幾度かの離婚を経ていることは承知しているし、割り切ったつもりでいた。けれど園山が奏を引き連れて来た時、心臓が鉛を流し込まれたように重たくなった。

園山の前とは打って変わり、奏はいちから丁寧に説明する。聞き終えて香織はひとまず安堵した。安易に全部信じるわけにはいかないかも知れないけれど、奏の事情は彼女の想像とは大きくかけ離れたところにあった。

「不安にさせてしまったらごめんなさい」

「大丈夫。すこし驚いただけだから」

彼女は思う。園山はきっと香織のことを強い人間だと思っているだろうけれど、そんなことはない。ちょっとしたことで不安になるし、時には無理して笑うこともある。ただ、どうやって人に頼っていいかわからないのだ。

強い、人間。香織の中でそれを体現している存在としてエヴァ・ブラウンが挙がる。

「ついでで申し訳ないけれど、私もちょっと語りたくなってね。聞いて欲しいんだ。エヴァ・ブラウン、世界で最も気高い花嫁の名前だ」

バーテンダーにも言われていた。香織のことを気にかけるようにと。彼女の母親が病氣ともあり、園山の資産が目当てだと邪推する人間が少なからずいるとのことだった。自分に向けられる視線より彼女への非難の方がずっと痛い。俺に何が出来るのだろうか。答えは出ない。

そろそろ頃合いかと思い、ソファアを立ってリビングに向かう。

ドアの前まで来て香織の声が聞こえた。世界で最も気高い花嫁。園山はドアにもたれかかり、耳をそばだてる。煙草を取り出し火を着ける。

「エヴァ・ブラウンはアドルフ・ヒトラーに深い愛情を抱いていた。ヒトラーの愛犬にすら嫉妬してみせた程だ。勿論、その交際を認める人間はいなかった。彼女の生活は大きく制限され、ヒトラーと口論になることも少なくなかった。いよいよ戦火がベルリンまで及ぶと家族は再三、疎開するよう言ったがエヴァは最後までヒトラーと共にあることを選んだ」

何もしていない時間が灰になって消えていくように煙草は次第に短くなっていく。自分は何をしているのだろう。園山はうなだれる。

「四月二十九日、二人は地下壕で簡素な手続きで結婚式を挙げた。ヒトラーからはブラウン嬢と呼ばれていた彼女は式の後にもそう呼びかけられると『もうヒトラー夫人と呼んでもいいのよ』と言ったという。翌日、二人は寄り添って自殺した。彼女は最期までヒトラーへの愛を貫き通したんだ。例え、世界中の誰からも祝福されなかったとしても」

香織は話が終わり、しばらくして奏が呟いた。「エヴァはきつと幸せだったと思います」

「だって彼女は、ヒトラーの最後の女になれたのだから」

「私も、そう思うよ」

二本目の煙草に手は伸びなかった。

卵男の殻？

国道の渋滞を抜けて、ようやく踏み入れた動物園は拍子抜けするくらい空いていた。これでちゃんと動物たちの餌代が稼げているのか園山は心配になった。

キリンに餌を与えている瞳を、ベンチで宮沢賢治の詩集『春と修羅』を読む麻生の横に立って眺める。幾度となく読み返された本は角が削れていた。

「お前は本当に宮沢賢治が好きだよな」

「『永訣の朝』が特に良い。死にゆく妹トシが賢治に頼むんだ。一緒に育ってきた二人の茶碗にそれぞれ雪を一掬いずつ取って来て欲しいと。ひとつは賢治を『いっしょうあかるくするため』だと気付く。トシに何かしてやりたいという賢治の想いに応える為、何も出来なかったと賢治が悔やまぬように彼女は最期のお願いをした」

動物は見ないのか？ と園山は訊ねた。

「動物園はあまり好きじゃないんだ。何て言うか、節操が無い」

「動物たちがお前みたいに理屈をこねないから、動物園は成り立ってるんだっつうの」

同じ賢治なのにお前は宮沢賢治とは大違いだなと麻生は朗らかに笑う。余計なお世話だと唇を尖らせた。

キリンの長いまつ毛と濡れたような眼は慈愛と悲哀を帯びて見えた。広大なサバンナから狭い檻の中に連れて来られたにも関わらず、文句の一つも言わず落ち着きをはらった様子で首を伸ばす。礼をするように頭を下げて、瞳の手から餌を食べた。

「キリンの首が何故伸びたのか今でもわかっていないらしいな」

園山はふと思いついたことを口にする。すると麻生がまっすぐにキリンを見据えて言った。「警戒心が強く、ほとんど眠れないキリンは夢を見るのだろうか？」

「おれは思う。夢を見れない代わりに、キリンは誰よりも遠くの景

色を眺めることを許されたのだと。だからキリンはどんなに視線が
高くとも決して奢らない」

おれはキリンになりたい。麻生はそう結ぶ。園山は彼が本気で言
っているのだと感じた。いつだって麻生は瞳から目を反らす。麻生
は彼女が気付かないくらい遠くから、望んでいたいのだと知ってい
る。

しばらくして瞳が手に袋を抱えて戻ってきた。中から取り出した
のはスノードームだ。彼女はそれを逆さまにする。ガラス細工の空
に雪が還っていく。

卵男の殻？

彼女の手の中で、ミニチュアの動物園に雪が降り積もっていく。砂時計のようだと園山は思った。

園山が瞳と同棲を始めると、スノードームは三段カラーボックスの上に置かれた。これといって丁度良い高さの家具が無かったからだ。訪ねて来た麻生がそれを見てマザーグースの『ハンプティ・ダンプティ』を諷んずる。

ハンプティ・ダンプティ、塀に上った。

ハンプティ・ダンプティ、落っこちた。

王様のお馬と王様の家来みんなでも、

ハンプティ・ダンプティはもう戻せない。

帰り際に麻生は言った。「世界は詩で溢れている」と。

麻生が帰ったあとでそのことを話すと瞳はやっぱり麻生君って面白く関心していたのを見て少し嫉妬した。

「そう言えば、ハンプティ・ダンプティって元々はなぞなぞで『卵』のことらしいな」

「もし割れていなければ何が生まれたのかしら？」

さあな。園山はそっけなく答えた。ハンプティ・ダンプティは塀に上った。自らの危険も顧みず。何がそんなに彼を駆り立てたのかわからない。ただ、わかっているのは割れてしまったという事実だけだ。覆水盆に返らず、と言ったところだろうか。

「ハンプティ・ダンプティは『鏡の国のアリス』にも出てくるのよ。知らなかったでしょ」

瞳は得意気だ。

「どんな風に出てくるんだ？」

「確か『どうしてそんなところに一人で腰掛けているの？』とアリ

スに聞かれて『誰も隣に座っていないからに決まっているだろうが』
って答えていたわね」

その言葉が園山に重くのしかかる。一人で高いところにのぼると
いう孤独。最初に首が伸びたキリンは、きつと寂しさに耐えていた。
遠くに夜明けを望みながら、サバンナの大地の真ん中でひっそりと
同じ目線に立ってくれる誰かを待ちわびていた。

麻生は動物園で言った。キリンになりたい。どんなキリンに麻生
はなりたかったのだろう。それは孤独に耐えられるキリンだったの
ではないか。

麻生も瞳を愛していたことを知っている。だからこそ彼よりも早
く瞳の隣に立つことに躍起になった。そして今、自分の醜さに園山
は気付かされた。

ハンプティ・ダンプティはもう戻せない。今思えば、あの詩の暗
誦はそんな園山への当て付けだったのではないだろうか。事故で麻
生が死に、確かめる方法が失われたことで詩は余計に重みを増した
増した

本当に事故だったのか、園山は苛まれ続けている。去り際に麻生
は世界は死で溢れていると言ったのではないだろうか。罪悪感は募
っていた。

卵男の殻？

そうだろう麻生。半身だけ起こして呼びかけると麻生は歩み寄りベッドの端に腰掛け、前屈みになって本を読み始める。

「俺が憎いんだろ？ お前の気持ちを知っていながらお前から瞳を取り上げた。それなのに彼女を不幸にして、次はうまくやろうだなんて虫の良いことを考えてる俺が」

「なあ、スクルージ」

麻生が言葉を遮る。文庫本を閉じ、生前となんら変わらない柔和な表情で園山を見やる。本の表紙が見えた。『クリスマスキャロル』だった。

なんだマーレイと園山は聞き返す。どんな恨み辛みも受け止める気でいた。

「お前がどう思おうが自由だ。だけど、俺の気持ちを勝手に決め付けて一人で傷付くのはやめてくれ」

きつと麻生さんなら、そう言うと思うよ。奏の声だった。眼を開けると見慣れた天井が映る。涙が頬を伝った。ベッドの傍らには奏がいる。

「うなされていたけど大丈夫？」

園山は答えない。サングラスに手を伸ばしてかける。視界がライトグリーンに染まった。緑に色付いた世界になれたのはいつからだろう。麻生たちといった頃はそんなことはなかった。

「お前さ、瞳と麻生の子どもだったりするのか」

「何故そう思うの？」

「俺は一度も麻生の名前を出してない」

「瞳さんの子だったのは認めるけど、麻生さんのことは聞いて知っているだけ」

「お前いくつだ」

奏は十七と答えた。自分はそんな前にもう愛想を尽かされていた

のか。落胆と諦めが同時に園山を襲う。「そうだよな、俺は彼奴を
ほったらかしにして働いていたんだからな」

「それでお母さんとの約束は思い出せた？」

園山は首を落とすように頷く。忘れてなんていない。毎月、雑誌
を買って考えていたのだから。東京タワーで自分は過去の清算をす
るのだと予感した。

「首を長くして待っていたわ」

「キリンだけにか？」

何かを見上げて感嘆したのはいつ以来だろう。東京タワーの真下で
園山はそう思った。奏は外階段を使って登り、そしてお互いが知ら
ない間の瞳との思い出を交互に話し合おうと提案する。

「どうせ大方聞いているんだろ？」

「当事者に聞くのとはまた違うでしょ？ それに登りきる頃には
333メートルの思い出が積み上がる」

奏の無邪気を園山は笑う。東京タワーは特別展望台でも250メ
ートルがせいぜいなのだ。

今でこそ裕福な園山にもその特別展望台に登るための、たった6
00円を惜しんだ時代があった。

冷たい風がコートを撫でる。園山は娘の手を取った。冷え切った
園山のものとは違う、絹のような手触りの温かい手だった。

「高い所に置いてきた、大事な約束を果たしに行こう」

卵男の殻？

二人で登った。どちらが言い出したかなんて些細なことは覚えていない。ただ、瞳と遊びまわって何となく最後に東京タワーに行き着いた。本当は双眼鏡も借りてやりたかったし、特別展望台にも行きたかった。

次は必ず連れて行く。園山はそう言った。瞳はおかしそうに笑って、ほんの一瞬、唇を重ねる。

その時に続きをしようと交わした指切り。けれど二人が特別展望台に行くことは、無かった。

「お父さんの体力、皆無だよね」

なぜ瞳はお前に容赦というものを教えなかったと毒づき、長椅子に腰を降ろす。寒さと疲労で脚が棒のようだ。情けなく震えている。一休みがてらに話をしようかと奏が取り出したのはハンカチに包まれた陶器の破片だった。マグカップの持ち手のようだ。二つあり、同じような形をしているが片方は半分しかない。

「これ、麻生さんが亡くなった時に持っていたの」

園山の心臓がドクンと跳ねた。ハンプティ・ダンプティはもう戻せない。頭をその言葉が駆け巡る。

「一対のマグカップ。あなたと瞳さんのお祝いにと。事故で割れてしまったけど」

そんなものがあつたなんて聞かされていなかった。恐る恐る園山は聞く。

「瞳が持っていたのか？」

「そう。あなたがもしそんなものを遺されたら、とらわれてしまうだろうって」

逆効果だったみたいだけどねと奏。園山は破片を手に取り、転がす。

冷たく、破損した箇所は爪でいじると少しだけ欠けた。

「麻生は宮沢賢治の詩集をよく読んでいた。『永訣の朝』って詩が好きだって。揃いのマグカップってさ、生涯使えてことだったんだろうな」

どちらかが遺される人を想い、一掬いの雪を頼むその時まで離れることがないようにと麻生は願った筈だ。

「難しく考えることはないわ。ただ、祝福されていたのよ」

園山は立ち上がり、特別展望台に向けて足を進める。夜は少しずつ深まっていく。ネオンの明かりが街に灯り始める。

特別展望台で辺りを見回す。瞳を探していた。けれど彼女の姿はない。

「瞳さんはいないわよ。私が瞳さんをお母さんって呼ばないのに気付かないの？」

「どういことだよ」

奏の肩を掴む手につい力が入る。

「瞳の娘だっていうのは嘘だったのか？」

「私ね、養子なのよ。瞳さんが再婚した後に関われてきた」

卵男の殻？

病床に伏せた瞳はよく奏に言っていた。私はひどい女だと。懺悔だった。

「『もしハンプティ・ダンプティが割れなければ何が産まれてきたのか』。私はずっと考えていたの」

「だから私を引き取ったのね。ある程度成長した子供に引き取り手がつくなんて変だと思ったわ。私はその園山さんとの間に産まれてくる筈だった子供の代わりだったわけだ」

激昂するわけでも、軽蔑するわけでもなく奏は平然と受け止めた。瞳は怒らないの？ と奏の顔を覗き込む。

「物心ついたあとで引き取られると、自分が他人と暮らしてる感覚がどうも抜けないのよ」

そう、と瞳は短く答えた。「でも怒鳴ってくれた方が私はずっと楽だったわ。つまり私は奏の母親にはなれないのね」

「そんなことはないわ。初めて本音で話せた」

瞳の思い出話は尽きない。いつも決まって出て来るのは、気難しい園山と温和な麻生の二人だった。

最期に瞳は言う。

「賢治に伝えてほしい。『もう忘れて良いから』って」

視界が涙で揺らめく。サングラスを外し、俯くとズボンに落ちた涙が染みをつくる。自分が積み上げて来たのは自身を独りぼっちにする為の高台だったと気付き、涙は止まらない。

「期待していたんだ。ここに来たら瞳に逢えるって。そしたらお別れを言おうと思ってた。俺はもう大丈夫だって」

最上階の景色を手に入れて、何もかも失った。例えようのない喪失感だった。高いところから世界を見たかったわけじゃない。誰か

と一緒に見るのが大事だったんだ。

「どうして、そんなところに一人で腰掛けているんだい？」

顔をあげると、香織が目の前に立っている。奏はいなくなっていた。涙を拭きながら園山は言う。

「誰も隣に座っていないからに決まっているだろう」

「なら、私が座るよハンプティ・ダンプティ」

割れたスノードームから溢れてきたかのように雪がネオンの底に降り積もっていく。

結婚式を一週間後に控えていた。

東京タワーから帰るともう奏の荷物は無くなっていた。香織に聞くと、外階段で登るからエレベーターで特別展望台に先回りしているように奏に言われていたらしい。してやられたわけだと園山は苦笑いを浮かべる。

園山は香織に椅子を一つ注文した。いつか奏がひょっこり帰ってくるような気がした。

香織の様子が変わなことに気付き問い質すと、母親が危篤だと聞かされる。少し考えてから園山は言った。

「今から病院で、お前の母親の前で結婚式を挙げよう」

「何をむちゃくちゃを言ってるのだ園山さん。それに今からでは誰も集まってはくれないよ」

スカートの裾を両手で強く握りしめて震えているのが見えて園山は香織を抱き寄せる。

「誰が世界中の人間に祝福されたいと言った？」

その言葉が香織の琴線に触れる。

「それから、もう下の名前で呼んでくれよ香織」

園山は照れくさそうに笑って見せる。

窓の外では作業するクレーン車が建築途中のビルディングを少しずつ高くしていた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0843p/>

ハンプティ・ダンプティの殻

2011年7月4日03時38分発行